Osaka Gakuin University Repository

Title	ミハイル・アレクサンドロヴィチ大公の日記（1916 ー 1918） Diaries of Grand Duke Mikhail Alexandrovich（1916-1918）
Author(s)	広野　好彦 (HIRONO YOSHIHIKO)
Citation	大阪学院大学　国際学論集（INTERNATIONAL STUDIES), 第 33 巻第 1・2 号：31-53
Issue Date	2022.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

ミハイル・アレクサンドロヴィチ大公の日記（1916－1918）

広　野　好　彦

Diaries of Grand Duke Mikhail Alexandrovich（1916-1918）

HIRONO YOSHIHIKO

ABSTRACT

Grand Duke Mikhail Alexandrovich was the third son of Tsar Alexander III and brother of Tsar Nicholas II. He was expected to support the dynasty as a general and be obedient to the emperor. Indeed, he did absolutely nothing on the political front. In his personal life, however, he shook the dignity of the dynasty by marrying a once-divorced commoner, against the emperor's order. Because of this marriage, he was exiled from Russia, deprived of his privileges and position. However, after the outbreak of World War I, he appealed to the Tsar to return to Russia and to fight for his country, even as a soldier. He was allowed to return and served as cavalry divisions commander in the Caucasus region.

Now his diaries and letters from December 1916 to June 1918 have been translated into English and published as a book. The purpose of this paper is to determine what the Grand Duke thought and did after Gregorius Rasputin's death and during the February and October Revolutions, based on his diaries and other documents.

Although he was not active in political activities, in November 1916 he wrote to the Tsar that the situation is serious and that in order to win the support of the people in Russia, it was necessary to eliminate the influence of unpopular ministers and the empress, and asked him to name ministers who had the support of the people. But there was no response; when the

revolution broke out in February 1917, he begged the Tsar to appoint Prince Lvov as prime minister and to organize a responsible ministry with the advice of leading moderate politicians. Grand Duke Mikhail believed that these measures were the only way to save the dynasty. Grand Duke Pavel issued a similar proclamation, proposing a transition to a constitutional monarchy. Grand Duke Mikhail agreed. Nicholas II decided instead to send a large force led by General Ivanov to quell the chaos, and he himself tried to go to the capital. These efforts proved futile, however, as on March 3, 1918, to everyone's surprise, Nicholas II decided to give the throne not to his son but to his younger brother, Grand Duke Mikhail. Mikhail had refused to take the throne, partly on the advice of many ministers of the Provisional Government. Thereafter, Grand Duke Mikhail retreated to his home in Gatchina, near Petrograd. He led a relatively peaceful life. However, on three occasions he was detained with his family because of the political situation; on the third occasion, he and his private secretary were exiled to Perm, Siberia. There, in June 1918, he was kidnapped and killed. The local Bolsheviks feared that the White Army would seize the Grand Duke.

ミハイル・アレクサンドロヴィチ（Mikhail Aleksandrovich）大公は、アレクサンドル３世の第５子（３男）として生まれた。ロマノフ王朝はこの時期において、帝位継承は男系長子継承が確立していた。ニコライ２世（Nikolai II）が1894年に即位したとき、ミハイルは継承順位２位であった。兄ゲオルギー（George）が、1899年に夭折したのち、継承順位は１位に上がる。1904年、ニコライ２世に待望の長男アレクセイ（Aleksei）が生まれるとともに、継承権は２位となった。ミハイルは、このように兄を支えるという地味な立場にあり、確かに政治的には何の問題も引き起こさなかった。

しかし彼は、プライベートで王朝を揺るがせた。彼は、1908年ごろ、ナターリア・セルゲイエヴナ・ブルフェルト（Natalia Sergeyevna Wulfert）と恋愛関係に陥った。ナターリアは皇族ではない平民であり、さらに当時ミハイル大公の同僚の将校の妻であった（しかも彼女はこの時すでに離婚歴があった）。このスキャンダルは決闘騒ぎを引き起こしかけた。ミハイルとナターリアの仲を割こうとする関係者の努力は実らなかった。ミハイルは、1910年、彼女との間に長子を設けたうえ、皇帝たちとの約束を破り、1912年、ウィーンのセルビア正教教会で結婚を強行し、その結果、地位や所領をはく奪され、ロシアを追放されることになる。

折から生じた第一次世界大戦を機に、ミハイル大公は、兄に対して、祖国のために尽くしたい旨を伝えて、当時居住していたイギリスからの帰国を認められた[1)]。ミハイルは、西南戦線においていわゆる「野生師団」と称されたカフカスの現地騎兵師団の指揮をゆだねられた。ミハイルは、ここにおいて軍功のため２度ゲオルギー勲章を授けられることになる。そして妻と息子のために爵位も授けられ、自己の領地も回復することができた。

ミハイルが歴史の表舞台に一瞬だけ飛び出たのは、1917年３月２日、ニコライ２世から帝位を譲位され、拒否した時であった[2)]。その後また彼は

1）拙稿「マリア皇太后日記」、大阪学院大学『国際学論集』第32巻１・２号、2021年12月、5-7頁。

2）この論文において、基本的に露暦が用いられる。20世紀においては西暦に対して13日遅れていた。

歴史の背景に去っていった。

その大公の日記が英訳の上、刊行された[3)]。ロシアやアメリカの史料館でのみ閲覧できるものが公刊され、容易に読むことができるのは喜ばしい。出版された英訳の日記は、1916年12月１日から1918年５月28日までのものある。時期的には、上記の大公の帝位継承拒否、さらに２月革命と10月革命を含んでいる。日記から窺えるのは、帝位継承拒否の際の大公の考えであるはずだ。さらに革命とその混乱期を大公がいかに見ていたかも大きな課題となろう。

※

英訳の日記がはじまる1916年12月は、大公が野生師団勤務時に悪化させた胃潰瘍の静養のために家族同伴でクリミアのアイトドルにいる時期であった。大公は戦時とは思えない伸びやかな日々を送っていることが見て取れる。大公らは12月８日、アイトドルを出発し、途中で（兄ゲオルギーから譲られた）ブラソヴォの領地に滞在し、12月30日、自宅のあるガッチナに到着している。この移動の途中、12月19日の日記の記述の終わりに、「私たちは新聞でペトログラードにおけるグリゴリー・ラスプーチンの殺害を知った」という素っ気ない記述がある。この事件が大公の日記を波立たせる。

ラスプーチン（Grigorii Efimovich Rasputin）は、霊能力を持つと信じられ、皇太子の血友病「治療」をきっかけに、皇帝一家に取り入った。そしてプライベートに、パブリックに影響力を行使していると考えられた。その目に余る影響力をそぐために、ラスプーチンの暗殺がミハイル大公の日記記述の２日前（12月17日）に実行されたのであった。

皇族、とりわけ大公たちの中にも、アレクサンドラ（Alexandra Feodrovna）皇后とラスプーチンの信任で支えられている内閣を、国民の信任を得ている内閣に替えなければならないという動きがあった。実は、ミハイル大公

3）Michael Romanov: Brother of the Last Tsar, *Diaries and Letters, 1916-1918*, translated by Helen Azar, Washington D.C., 2020.

も、1916年11月11日付のニコライ２世宛の書簡で同様の見解を述べていた。

「あなたの近くにいる一部の人々、そして現在の政府の一部を組織している人々に対する憎しみは、右翼、左翼、穏健派を束ねています。この憎しみは、変化の要求とともにあらゆる機会に公然と表現されています。」そのうえで「最も嫌われている人を取り除き、彼らを汚れていない人に置き換えることで…今の状況から抜け出す良法を見つけられるでしょう。」

しかしニコライからの返事はなかった[4)]。

さらにそれだけではない。ラスプーチンの殺害には、皇帝の姪の夫にあたるユスポフ（Felix Feliksovich Youssoupov）公爵、さらにはドミトリー（Dmitri Pavlovich）大公が関与していた。

アレクサンドラ皇后のドミトリー大公に対する怒りはすさまじく、彼を懲罰としてペルシア戦線に派遣することが決定された。ドミトリー大公は、パーヴェル（Pavel Alexandrovich）大公と先妻との間の子供である。パーヴェル大公が再婚にあたり「貴賤結婚」をおこなったために、ドミトリーは子供がなかったセルゲイ（Sergei Alexandrovich）大公の下で養育され、皇帝一家とも親しい関係を結んでいたのであった。

ミハイルの日記によれば、1917年１月３日、ガッチナからペトログラードに向かい、「12時にミヘニ叔母を訪問した。そこにはアンドレイとボリスがいた」とある。

ミヘニ叔母は、アレクサンドル３世弟の故ウラジーミル・アレクサンドロヴィチ（Vladimir Alexandrovich）大公の妻、マリア・パーヴロヴナ

4）Donald Crawford, *The Last Tsar Emperor Michael II*, Scotts Valley, 2012, pp.125-126.
　アレクサンドル・ケレンスキーによれば、1915年秋に、ミハイル大公に親しいパーヴェル・トルストイ伯爵が彼を訪問し、大公が兄である皇帝から帝位を受け継いだ場合の、労働者の反応を尋ねたという。政治的関心が薄いミハイル大公が自らこのようなことを謀ったとは考え難いので、ナターリアの差し金ではないかという推測がなされている（*Ibid*., pp.109-110.）。また1916年秋には、オクチャブリストのグチコフが企てたとされる宮廷クーデタにおいて、ミハイルは新皇帝と目されたアレクセイの摂政としてその名前が挙げられている。大公が直接的間接的にこのクーデタに参加したという証拠はなく、単に名前が使われたということにすぎないと思われる（和田春樹『ロシア革命－ペトログラード 1917年２月』作品社、2018年、122頁）。

（Maria Pavlovna）である。そこには息子のボリス（Boris Vladimirovich）大公とアンドレイ（Andrei Vladimirovich）大公が同席していた。訪問の用件は書かれていないが、ドミトリー大公の赦免に関することであったと推測される。しかし日記のこの後の記述を追っても、ミハイル大公が具体的に何をしたのかまではわからない。

また同日ミハイル大公は「M.V.ロジャンコの所に行く」とある。日記の記述はこれだけである。ミハイル・ロジャンコ（Mikhail Vladimirovich Rodzianko）は、オクチャブリストの指導者であり、ドゥーマ議長であった。

ミハイル大公とロジャンコの関係の始まりはどのようなものであろうか。ロジャンコ側の史料では、大公はそれまで何の関係もなかったがいきなり訪問したとある。マリア・パーヴロヴナを訪問したのちに、ロジャンコを訪問しているのであるから、前者から何か示唆を得たのであろうか。

また同じくロジャンコによれば、彼は、マリア・パーヴロヴナにこの頃に呼び出された。その理由は、民衆の信頼を失っているロマノフ王朝に対するマリアの不安であった。そして彼女はロジャンコに対してアレクサンドラ皇后の「物理的排除」を訴えたのであった。ロジャンコは、皇帝に忠誠を誓っているドゥーマ議長として、このような会話をできるはずはなく、聞かなかったことにした[5)]。

もっともミハイルとロジャンコの会見は、マリア・パーヴロヴナの示唆によるかどうかは微妙である。大公とロジャンコの関係は、マリア・パーヴロヴナのお気に入りの息子であるキリル大公にも隠されていた[6)]。マリア・パーヴロヴナからロジャンコのことを耳にして、大公が自分の発意でロジャンコの所に行ったというのが矛盾のない説明であろうか。

ロジャンコの回想録では、大公は革命が起きるのかどうか尋ねている。ロジャンコは、政府とアレクサンドラ皇后が、ロシアをドイツの手に引き

5）*The Reign of Rasputin: An Empire's Collapse Memoirs of M. V. Rodzianko*, translated by Catherine Zvegintzoff, London, 1927, pp.245-247.

6）Mark D. Steinberg, Vladimir M. Khrustalev, *The Fall of the Romanovs: Political Dreams and Personal Struggles in a Time of Revolution*, Yale, 1995, p.93.

渡そうとしているという噂が確認されれば、革命が起きると述べている。それを防ぐためには、責任ある民衆から信頼される人物で構成された政府を作る必要があると付言した。大公の質問に答える形で、皇后の国事に対する干渉を排除するという条件があれば、ロジャンコは自ら責任ある地位に就く準備があるとし、ツァーリに対する報告の機会をミハイルに求めて、大公はこれを諾した。１月７日に、ロジャンコは皇帝により謁見を許され、同趣旨のことを述べた[7)]。なお、１月９日、ロジャンコはガッチナの大公を訪問している。上記の返礼であろうか。日記にはこの事実が記載されるだけである。

１月12日、大公は、ツァールスコエ・セローに赴いている。「ニッキーとアリックスの所に行った。そこで私たちは昼食をとり、それからニッキーと話をした。」ニッキーはニコライ２世、アリックスはアレクサンドラ皇后の愛称である。話の中身の記述はない。

大公の日記から、さらにニコライの名前を探すと次の個所が見当たる。

１月17日、「私はニッキーとアリックスの所に正餐に行った。」

１月18日、「夜に私はツァールスコエのニッキーに対して手紙を書いた。」この手紙は付録として日記に収録されている。中身は大きく分けて二つである。ドミトリー大公の部下が大公訪問の許可を求めていることを皇帝に知らせること。次にニコライ自身が面会を約束したが、まだ実施していない人物に対する面会を請願することである。

なお、１月17日の大公の皇帝訪問は、彼の南西戦線への対する出発のあいさつの意味があった。大公は、１月19日、ガッチナを出発して、途中様々な場所を経由し、１月25日にナドヴルナヤに到着している。第９騎兵師団第２旅団、独立騎兵師団第２旅団に、大公は転勤にあたっての別れの挨拶をおこなっている。さらに自ら最前線の高地に出向き、狙撃兵に対して感謝を述べている（１月27日）。１月31日、ナドヴルナヤを去る時には、大公は、なじみの兵士たちに別れのスピーチを行い、大公は兵士のトランペットにより見送られた。なべて淡々と事実を書き連ねられることが

7）*The Reign of Rasputin*, pp.248-255.

多い大公の日記において、「感動的で悲しかった」という短いが情感を表現した記述がある。大公の心の居場所がここにあったことがうかがわれる。

２月６日、帰還後、大公は皇帝の所を訪れている。「私はツァールスコエ・セローのニッキーの所に行き、お茶を飲んだ」とある。

２月10日にも、「ニッキーの所でお茶を飲んで、その後話をした」とある。ニコライと大公の話の中身は相変わらず示されていない。また日記の注記によれば、この日の午後４時、ニコライ２世は、ミハイル大公とのお茶会の合間に、ロジャンコと会った。国会再開を控えて彼は皇帝に状況を報告した。ロジャンコによれば、皇帝は全く状況を理解していないようであった。「軍や都市の悪い食糧事情、機関銃の警察への譲渡、一般的政治報告を読む際に、皇帝は怒り、遮った。『急ぐことはできないのですか。ミハイル・アレクサンドロヴィチが私を待っています』…国内における恐るべき雰囲気と革命の可能性について指摘した時、皇帝は『私の情報とは真逆です。国会において、厳しい発言が行われるなら、解散されるでしょう』と述べた。」また同じ10日には、この前に、ニコライの妹婿であるアレクサンドル・ミハイロヴィチ（Alexander Mikhailovich）大公が、ニコライ同席のもとアレクサンドラ皇后と話をして、政府が国民の信頼を得ていないことを訴えている。これに対して皇后は「余計なことに口出しせずに、忍耐をして、現在の政府に時間を与える必要がある」と反論をして、皇帝は傍観しているのみであったという[8)]。

革命前における大公日記中の最後の皇帝に関する記述は次のようである。

２月22日、「私はニッキーとアリックスとともに昼食。２時にニッキーはモギリョフに出発した。」モギリョフは当時ロシア軍総司令部が位置しているところである。ニコライはロシア軍総司令官であり、前年末以来、長期にわたり首都に帰還していたが、戦線に戻るということである。

8）拙稿「ニコライ２世の日記 1917-1918年」、大阪学院大学『国際学論集』第28巻１・２号、2017年12月、35-37頁。

※

２月革命の直接の契機は、２月23日、ペトログラードのヴィボルグ地区にある繊維工場の女性たちがパンを求める声を上げて街頭に繰り出したこととされる。ペトログラードから50キロ程度離れたガッチナに住んでいた大公の日記には、25日の記述から、ペトログラードにおける状況悪化の様子が伝えられていたことが見て取れる。この日、ミハイル大公はガッチナにいたのであるが、「本日、ネフスキー通りで騒乱があった。労働者たちが赤旗を持って歩き回り、警察に対して手榴弾や瓶を投げた。軍が銃撃しなければならなかった。混乱の主原因は小麦の不足である」と記していた。

２月27日、大公はガッチナを午後５時に出発しペトログラードに赴きマリインスキー宮殿に行った。日記からは読み取れないが、大公はロジャンコからの招請を受けたと思われる。実際マリインスキー宮殿には、ロジャンコ、ネクラーソフ（Nikolai Vissarionovich Nekrasov）、ミリューコフ（Pavel Nikolayevich Milyukov）ら国会議員らがいた。ロジャンコらは、すでにこの時、立憲君主的改革の方向で事態収拾に動き、モギリョフにいる皇帝に対してメッセージを送っていた。ロジャンコは、この際、大公に同じようなことを求め、大公は同じ方針で臨むことになる。珍しいほど明確な政治的行為に大公はまい進するのである。

「９時に私はモイカの陸軍大臣の所に行き、無線機を通じてモギリョフのアレクセーエフ〔参謀総長：筆者注〕に、醸成されつつある革命を鎮めるために、直ちにとることが必要である方策をニッキーに伝えるよう依頼した。とりわけ全内閣の辞職、それからリヴォフ公爵に対して彼の判断で新しい内閣を選ぶように依頼することであった。私は直ちに対応する必要があると付け加えた。なぜなら時間は待ってくれないし、あらゆる時間が貴重であったからである。反応は次の通りであった。私〔ニコライ２世：筆者注〕の到着までいかなる変更もしないこと。総司令部からの出発は明日の午後２時半に予定された。あぁ！事態を緩和しようとするこの試みが不成功に終わった後、私はガッチナに戻る計画を立てた。」

大公の主張は２つであり、現在の内閣の総辞職、国会議員ではなかった

が地方自治会のトップを務めていたリヴォフ（Georgy Yevgenyevich Lvov）公爵に新しい内閣の選任をゆだねることであった。戦時中にとりわけ強く主張された、国民からの信頼を得られ、ドゥーマの協力を得られる内閣の下において、立憲君主制の統治体制を作り上げることである。とりわけ大公にとって重要であったのは、この方策によりロマノフ朝を破滅から救い出すことであった。

しかしながらこの期に及んでも皇帝の返答は煮え切らないものであった（もちろんそれ以前におこなわれたロジャンコの呼びかけにも反応はなかった）。

皇帝の方策は、首都における騒乱を鎮めるために、イワノフ将軍指揮下の部隊を派遣すること。自ら首都に帰還することであった。大公はこれに対して、これもまた日記では珍しい落胆の言葉を率直に表明している。大公にとっては、万策が尽きた。大公は任務が完了したので、首都にいても仕方がないと判断し、秘書のジョンソン（Nicholas Johnson）とガッチナに車を駆って帰還しようとした。しかし警備している部隊に阻まれて叶わなかった。そして引き返して冬宮に避難した。だが、そこの防備も不十分であったので、ミハイル大公は守備隊に対して冬宮での防衛をやめるよう説得した。自らはミリオナヤ通りにあるプチャーチン公爵のアパートに身を隠す。プチャーチンは海軍将官であり、かつて大公のヨットの指揮官を務めていた。

大公がプチャーチンのアパートに避難して２日目の３月１日、「12時半、数人の将校とイヴァノフと呼ばれる弁護士で構成された代表団がやってきた。彼らは私に対してマニフェストに署名することを求めた。それにはすでにパーヴェルとキリル叔父の署名があった。このマニフェストにおいては主権者が完全な憲法を認めていた。」

この「大公のマニフェスト」を起草したのはパーヴェル大公とその周辺のものであった。その内容は、国民から信頼される臨時内閣の組織、立憲議会の招集をポイントとするものであった。ミハイル大公が指摘しているように、主権者が憲法を認める立憲君主制的解決方策であり、ニコライ２世の帝位維持が前提であった。すでに２月27日に、ミハイルが皇帝に進言

したのと同じような種類のものである。

なおロジャンコも３月１日に、大公を訪問する予定であったが、実現しなかった。翌２日、大公の日記には「ロジャンコから返答を得た」と簡単な記述がある。返答の中身は述べられていないが、日記の注釈によれば、「大公のマニフェスト」が失敗に終わったことを伝えたとある。

運命の３月３日、大公の日記は次の通りである。

「午前６時、電話によって起こされた。新しい司法大臣アレクサンドル・ケレンスキーより私に対してメッセージがあったのだ。内閣は全体で１時間後に私に会いに来るということである。実際彼らはようやく９時半にやってきた。」

この９時半以降の記述は空白のままである[9)]。

実際のところ、大臣たちがミハイル大公の所に急いでやってきたのは、３月３日午後11時20分であった。ニコライ２世が皇太子アレクセイに対してではなく、ミハイルに譲位する決定をしたことに関係している。ニコライが病気の息子を慮っての判断であった。

ミハイル大公と、最終的には10人を超した臨時政府の大臣たちは、長い時間をかけて議論した。臨時政府側の多数は、ミハイルへの譲位に反対であった。ソヴィエトと関係があった左派のケレンスキー（Aleksandr Fyodorovich Kerenskii）は、理由を次のように挙げている。国政に対して大公は全く関心を示していなかったこと、政治的陰謀で有名な「身分の低い」女性と結婚していること（ミハイル大公夫人の派手な交友関係がこのような言説の原因であろうか）、決定的な瞬間に決断力を欠いていることである[10)]。ミハイル大公と連絡を取り合っていたロジャンコでさえ反対していた。彼によれば、アレクセイ皇太子への譲位とミハイル大公という組み合わせは受け入れられたかもしれないが、大公が皇帝の座に就くことは絶対的に受け入れないと、この日の朝に、プスコフにいたルズスキー将軍

9）大公は多忙などの理由で日記をつけられない場合、後日補うことがしばしばある。しかしこの日の記述は公刊物から見る限りにおいて、空白として残されたままである。

10）アレクサンドル・ケレンスキー著、倉田保雄・宮川毅共訳『ケレンスキー回顧録』恒文社、1967年、282-283頁。

に述べて、大公への譲位という知らせが広まらないように求めていたのであった。この知らせが、すでに始まっている騒乱の中で火に油を注ぐ結果を招くかもしれないからであった[11)]。

ミハイル大公に刺さった言葉は、ケレンスキーの「殿下の生命を保証することができない」というものであった。さらにそれだけでなく、穏健なリヴォフやロジャンコにさえ同じことを言われていたのであった。結局のところミハイル大公は継承を拒否した。政治的基盤に欠ける大公は、おいそれと帝位を受け入れることはできなかったであろう。

ただし、大公の日記の注釈者は、この結論を「条件付きの受諾、あるいは民衆の意思に帝位を譲る」という微妙な表現でまとめている。この際にあたってのミハイル大公の考えを要約すれば、帝位を受け継ぐかどうかの問題は近い将来に開催される予定の憲法制定会議の意向に従う、そしてそれまでの間は臨時政府に従うことを国民に求めることであった。確かに前者に重きを置けば、このような解釈が可能な表現ではある。憲法制定会議が立憲君主制を採択する可能性を考慮したのであろう。だが、社会革命党、ボリシェビキ、メンシェィビキなどの社会主義政党が７割近い得票を得た選挙の結果を見れば、憲法制定会議がかりに正常に開催されたとしても、立憲君主制採択の見込みはほぼなかったであろう[12)]。日記注釈者はできる限りポジティブにこの意向を受け取ったのであろう。なお、ニコライ２世を含めて多くのものはこの決定を帝位拒否と受け取っている[13)]。

11）*The Fall of the Romanovs*, pp.103-105.　同様の考えを駐ロシア・フランス大使モーリス・パレオローグ（Maurice Paléologue）も抱いていた。３月５日に、「皇太子への直接的譲位が、進行中の革命を止める、または少なくとも革命を立憲改革の範囲内にとどめるための唯一の手段であった」。ここで重要なことは皇太子が帝位につくと宣言すれば、誰も彼を退位させる権限がなかったことである。パレオローグの見立てにどれだけの根拠があるのかは分からないが、ミハイル大公に対する譲位は法令的に問題が多いとの指摘はあたっている（「ニコライ２世の日記 1917-1918年」、40-41頁）。

12）Richard Pipes, *The Russian Revolution*, New York, 1990, p.542.

13）ニコライ２世の日記、1917年３月３日。「ミーシャは帝位を放棄したようだ。彼のマニフェストは、６か月以内におこなわれる憲法制定会議の選挙に関する美辞麗句で終わっている。このようなむかつくものに署名をするという考えを彼に吹き込んだのが誰かは神のみぞ知る。」（「ニコライ２世の日記 1917-1918年」、40頁）。

※

ミハイル大公は皇帝の弟として、民意を失いつつある王朝を守るため最後の段階において、政治的な行動をしたが成果が出なかった。他方ニコライ２世から、意外なことに譲られた帝位を受け止めることもできなかった。ミハイルは権力に執念を燃やす政治的人間ではない。３月４日、大公はペトログラードからガッチナにようやく帰還することができ次のように記す。「１時半頃、私たちはガッチナに着いた。私はついに帰宅したとき、安堵のため息をついた。」

これ以降、日記では、ペトログラードの政治的闘争の場から逃れて、ガッチナにおける日々が淡々と描かれる。例えば、皇室関係者が様々な理由で拘束され逮捕され、また一部の皇室関係者が首都近辺から逃れていた。３月９日に、大公は、ニコライ２世がツァールスコエ・セローで拘束されていることに言及し、４月27日は、パヴロフスクにドライブする際に、「アレクサンドル宮殿の囚人」（ニコライ２世一家）に思いをはせている。

３月23日には、ミヘニ叔母とボリス大公の逮捕の記述があり、３月25日には、マリア皇太后と大公の姉のオリガ・アレクサンドロヴナがアイトドルに移動することが述べられている。

このような状況の中、ミハイルはガッチナで制約はあるものの比較的自由な生活を送っている。ガッチナでは政治的嵐はまだ吹き荒れていなかった。４月16日に、ガッチナ宮殿公園にあるビーナスパヴィリオンの破壊を指摘し、４月21日には、大公自らそれを修繕している。また大公は、列車を利用して（皇族用の車両を利用するという特権はなくなったが）、あるいは自家用車を利用して、ペトログラードに行くこともできた。その目的も単なるプライベートなもの、領地管理に関するもの種々であった。ただ、ペトログラード区域を去ることは許されていなかった。

７月初旬においては、ミハイルは穏やかな様子でガッチナ近郊のドライブを楽しんでいる。その日記の末尾に少しだけ記される「７月危機」におけるペトログラードの様子との対照が著しい。

「7月3日月曜日、ガッチナ。11時から朝食まで、私はロールスロイスで子供、ミス・ニーム、マドマーゼル・バルヴィンを伴ってドライブをした。…朝食の後に少し休息をした。お茶の後ディナーの前に、ナターリア、シュレイフェル〔大公の隣人：筆者注〕、ベイビー〔大公の息子ゲオルギー：筆者注〕、そして私は二つの庭において枯れた枝を切った。ディナーの後に私たちはシュレイフェルとジョンソンを伴ってペトログラードの方にロールスロイスでいった。動物園、イェゲルスカヤ、サレジ、ペドリノを経由し、それからツガニツキー渓谷に到着する前に左折し黒い湖、パリツキー、コルパノ、バルト駅を横切って帰宅した。天候は暑くて20度。ほとんど太陽が出なかった。何度も雨が降った。しかし夜の6時以降には雨は止んだ。ペトログラードでは夜8時に混乱が始まった。街頭で銃撃があった。」

7月6日には、ミハイルはボリシェビキの退潮を記している。「ボリシェビキの成功は退潮し始めている。民衆は彼らはドイツとお金のために働いているということに気がつき始めている。」

またミハイルは軍人として、まだ継続していた戦争の遂行に関心が強かった。短い記述だがそれに関する記述が目立つ。前線における軍の規律の衰退、それにともなうように死刑制度が復活したことなどが記されている。

7月7日、「敵がブルゼジャン近くの私たちの前線を突破した。一部の連隊が攻撃するのを望まず、警告なしに撤収したためである」。

7月10日、「戦線からの恐ろしいニュース。タルノポリは銃撃なしに陥落した。12個連隊は逃亡、多数は降伏」。

7月13日、「南西戦線司令官コルニーロフ将軍は軍の恥ずべき振る舞いと私たちの前線の絶望的な状況についてケレンスキーに対して衝撃的な電報を送った。政府は前線において死刑を再び執行することに決定した」。

7月31日に、ミハイルは、ツァールスコエ・セローに幽閉されているニコライ2世一家が、その日の夜にトボリスクに移送されることを偶然に知った。その日の午後6時15分にガッチナを車で出発し、ペトログラードに駆け付け、ケレンスキー首相と掛け合って、ニコライとの面会の許可を

得た。

「12時に宮廷司令官コビリンスキーが私の所にきて、そして私たちはアレクサンドル宮殿に乗り付けた。厨房のそばで車を降り地下室を通り宮殿に入り、第４入口に行き、ニッキーのレセプションルームに行った。そこにいたのはベンケンドルフ伯爵、ケレンスキー、ヴァーリャ・ドルゴルコフそして二人の若い将校であった。そこから私は書斎に歩いて行った。そこで私はケレンスキーと警備主任少尉のいる前で、ニッキーに会った。私にはニッキーは相当調子が良いように思えた。彼と10分ぐらい過ごしてボリスの所に戻り、それからガッチナに戻った。ケレンスキーは私のためにこのミーティングを整えてくれた。それは本日全く偶然に私が午後にニッキーと家族のトボリスクへの出発に気づいたためにおこなわれたのだ」。

大公とニコライ２世のほんの短時間の、さらにケレンスキーやその他警備兵なども随伴したうえでの面会に対して大公のポジティブな反応は印象的である[14)]。大公の人柄の良さが出ているのであろうか。なおニコライ一家は翌日早朝にトボリスク移送の旅に出る。これが兄弟の最後の別れとなった。

※

その後のミハイルの日記を見ても、表面的には特に変わった様子はない。しかし治安の悪化を推測できるような記述が目に付く。８月６日には、大公の家の近くで、不審な４発の銃声が聞かれている。さらにこのことと関係あるのかどうかは不明であるが、８月11日には、前日からミハイル邸では10人の士官学校学生により警備が担われていることが記されている。また８月15から17日にかけては、大公は自分の家と周囲の間に電話線の設定を行っている。緊急時に連絡を取り合うためであろうか。19日に

14）ニコライ２世は７月31日の日記に次のように記した。「10時半ごろ愛しいミーシャ（ミハイル・アレクサンドロヴィチ）は、ケレンスキーと衛兵の長官を連れて現れた。会ったことは非常にうれしかった。しかし局外者がいるところで話をすることは不都合であった」（「ニコライ２世の日記 1917-1918年」、48頁）。

は、野で遊んでいる子供たちから、兵士たちが放火をおこなっている旨聞いている。

このような状況の中、ミハイルは、８月21日から９月13日まで合計24日、拘束される。３回の拘束の最初のものである。21日、大公がミハイロフスカに対するドライブを終えたのちに、大公邸内で拘束される。

「６時半までに帰宅した。15分後、私たちの庭と家屋は、ふたりの将校を伴った多数の兵士によって取り囲まれた。すぐにペトログラード軍管区司令官補佐コズミン大尉は、ガッチナの司令官スヴィツノフ大尉、ペトログラード市のコミサール（空白）中尉に伴われて、私に対して次のように宣告した。内務大臣と陸軍大臣の命令により私は家庭内拘束に置かれるということであった。」

ナターリアも同様の措置を受ける。

８月22日の記述によれば、60から70人の見張りが大公邸を取り囲んでいる。ただ、自分の逮捕やパーヴェル大公の逮捕に関する記事を見ていることから、外部からの情報遮断はなされていない。

ミハイルは拘束の理由を探している。８月24日、「５時頃にコズミン大尉が私に会いにきた。私のケレンスキー宛の手紙を持っていた。彼は言った。ケレンスキーは彼に私に対して次のように語ることを求めた。臨時政府は私の忠誠を疑っていない。民主主義と政府の立場のために私を世間から隔離することが必要であるということである。外国に去る問題については、コズミンが次のように答えた。現時点ではこれは全く不可能である。」

「民主主義と政府の立場」では大公の納得がいかない[15)]。８月25日、ミハイルは一つの答えを見つけている。かつての皇后の女官であるマルガリータ・ヒトロヴォ（Marigarita Sergeevna Khitrovo）が、ニコライが滞在しているトボリスクに行き、逮捕されたことである。この事実から、前皇帝

15）ところで、後者はどういうことであろうか？ミハイル大公が外国に去ろうとしていたのであろうか。この件に関連して、日記からわかることは、大公が1917年末以来、英国大使館と連絡を取り合っていること。さらにオランダ大使とも交渉をしていること（1918年２月５日／18日）。さらにデンマークにいる叔父にあたるバルデマール王子と連絡を取り合っていることが目につく。

救出の企てがもくろまれているとの説が捏造され、皇族が拘束を受けているということである。大公は「しかし明らかだがそんな陰謀はないのだ」とこの陰謀を強く否定する。また８月28日には、大公の日記には、「『ヴェチェルヌィ・ヴレーミャ』から私達は初めてコルニーロフ将軍のスピーチについて知った」という記述があるが、これも大公拘束の理由と関係しているであろう。臨時政府に歯向かったコルニーロフ将軍の勢力により、大公が奪われることが懸念されたのであろう。

コルニーロフ事件の進展とともに、ミハイルはガッチナからペトログラードに移されることになる。８月29日、午前５時10分に大公一行はガッチナを出発し、ようやく11時半にペトログラードのモールスカヤ61番地の内務大臣邸に連行された。そこには設備が何もなかったので、交渉の上、ミハイルの義兄である法律家アレクセイ・セルゲエヴィチ・マトヴェイ（Aleksei Sergeevich Matveev）のフォンタンカにあるアパートに移動が許された。大公はこの日の感想を「記憶するべき困難な一日」と記した。なお、大公を苦しめたのは、理由が不明確な意に反する移動や拘束だけでなく、胃潰瘍を原因とする胃痛であった。すでに８月20日には胃痛の記述が日記にみられる。まだガッチナで拘束されていた８月28日には、大公の体調はすぐれず、横になっていたことが窺われる。胃痛の中、大公は連行されたことになるのである。そして９月１日から拘束下ではあるが、医師の治療が始まっている。

外部からの一般的情報は得られていたので、「コルニーロフ将軍のペトログラードに対する攻撃は完全に止まる」（８月30日）、「コルニーロフ投降の準備」（８月31日）と書きつつも、自分に関する処遇の情報が得られず不安な気持ちとなり、さらに胃痛にも苦しめられる。なお、９月２日には、コルニーロフ将軍が逮捕されて、それと同時に民主共和制が宣言される。大公は、憲法制定会議に先立つ、このような宣言に対して冷淡な態度をとる。「この国に秩序と公正さがある限り、政府の種類に違いがあるのだろうか」と記す。なお、憲法制定会議前に共和制が宣言されたことに関して、当時首相であったケレンスキーは、独裁を標榜するボリシェビキなどの動きを考えに入れて、民主主義を守るために意識的に宣言したとす

る[16)]。

ミハイルは胃潰瘍の治療のために、食事制限、湿布を当てて横になること、精神の安定が必要と聞かされるが、精神的平穏が拘束状態では得られないと不平を述べる（９月４日）。９月６日に、大公らはガッチナに帰還が許される。コルニーロフ事件がとりあえず終結したことに関係していると思われる。さらに、９月10日、大公は、コズミン大尉を通じて、拘束からの解放を求め、13日午前８時半に、解放が宣言された。大公はなぜ拘束されたのか正確には分からず、これからも再発しない保証はないと不安を訴える。なおこののち、９月15日、コズミン大尉から、大公はクリミアへの旅行許可証を得ている。しかしこれが利用されることはなかった。

拘束中に悪化した大公の健康状態であるが、大公は、医師の管理のもと治療を継続している。９月18日には、大公は初めて固形食物をとり（ビスケット）、その後かゆとシリアル（20日）、バターつきパン（21日）、オートミール（22日）と変化する。27日には、医師から散策とドライブの許可を得ている。そして散策の中で、ガッチナが荒廃した様子を記録している。

９月30日、「３時にナターリアと私は白樺門にドライブに行き、そこから愛の島を散歩した。そこで私たちは壊されて引き落とされた大理石の像を発見した。堤に沿って散歩し古い温室を通り過ぎ動物園に向かい鳥小屋を通り過ぎた。夏の間に全ての鳥たちは売り払われたということを忘れていた。牛達は飢えていた。誰も夏の間彼らのために干草を準備することを考えなかった。」

なお、ミハイルはペトログラードにも出かけているが、そこでボリシェビキの反乱の兆候を見ている。日記には、10月19日、ペトログラードのマトヴェイの所で、領地管理の問題を議論したとき、「ボリシェビキの見世物」が予期されると日記に記されている。「見世物」とは、ボリシェビキの軍事蜂起の意であろう。また24日、ガッチナにおいて、ペトログラードではボリシェビキの攻撃に備えて橋がすべてあげられていると記している。

このようにミハイルは10月革命期にはガッチナにおいて、首都の状況に

16）ケレンスキー、前掲書、528頁。

注意を払うことになる。大公の日記に従えば、25日から首都における変調が記されている。

「ペトログラードのアリョーシャとアンドレエフから、私たちは午前中にケレンスキーがドノ駅に出発したと知った。噂によれば、彼らは軍隊の後についていると思われている。冬宮はボリシェビキによりとられた。そこでは噂によれば、臨時政府のメンバーがいたのである。ロシア共和国のソヴィエトはボリシェビキにより解体された。この国家の本部は彼らの手の中にある。街頭では一部の場所で銃撃がある。全ペトログラードの兵営は、ボリシェビキの側につき、すべての学校は臨時政府の側についている。」

26日には「すべての権力は軍事革命委員会により掌握された」、「ボリシェビキの勝利。いつまで続くか」と書かれる。27日には、ミハイルがガッチナを散策中、兵士から誰何をされている。大公は自分の正体を何とかごまかすことができた。このようなことはかつてなかった。ガッチナでは大公は革命後でも敬意をもって遇されてきたことを考えれば、状況の悪化が理解されよう。

他方、首都を脱した臨時政府首班のケレンスキーは、ガッチナ宮殿に移ったことが判明した。ガッチナが戦乱に巻き込まれるかもしれない状況が出てきた。大公は、秘書のジョンソンをガッチナ宮殿に派遣して、情報収集に努める（10月29、30日）。ジョンソンは、「ガッチナにおける状況は私たちに危機的と宣言された」との情報をもたらした（10月30日）。これを契機にして、大公たちは避難に備えて貴重品などの梱包を開始した。11月１日、最初に、子供たちを、ガッチナ南16マイルにあるバトヴァの知人の別荘に避難させた。他方、ケレンスキーは状況不利と判断し、ガッチナ宮殿から逃亡した。そしてガッチナはボリシェビキ軍により包囲された。

大公邸においても、警備員はボリシェビキ側の砲兵により武装解除され、取って代わられた。ガッチナでも軍事革命委員会が設立され、一応の秩序は確立した。委員会側からの大公に対する態度は丁重であった。11月２日には、避難していた子供たちが戻ってきて、その後大公の自動車２台が委員会により接収された。

こののち11月４日から10日余り、大公はまたぞろ拘束される。４日、軍事革命員会は、大公をペトログラードのスモルヌィ女学院に連行しようとした。スモルヌィはボリシェビキの本部が置かれていた。交渉の末「明朝、私たちを、私たちが選択する任意のアパートに移送することが決定された。理由は、通過する軍隊から私に対する危険の恐れが考えられることである。」反ボリシェビキの勢力による大公の確保を予防するということであろう。そして拘束期間は長くはならず、一時的と大公は判断した。しかし、11月５日午後１時出発の予定が、午後５時半に出発となった。大公が選んだミリオナヤのプチャーチン家のアパートに到着したのは午後７時であった。

今回の拘束は比較的緩やかなものであった。大公は、警備員が付いてはいたが、プチャーチン家のアパートの周囲の散歩が許された。11月７日には、プチャーチン家に知人や友人が集まり、具体的には何が論じられたかわからないが、白熱した政治的議論がおこなわれている。外部からの来客も認められた。11月12日には、英国大使館から２人の職員が大公を訪問している。訪問の理由は明示されないが、イギリスが大公の動向に関心を持っていた表れである。ただ、ミハイルたちはいつまでも拘束されることを好まなかった。11月14日には、前日、ジョンソンとガッチナのコミサール・ロシアルが、ボリシェビキの本部のあるスモルヌィで、交渉の上ガッチナへの帰還を取り決めたと記されている。そして15日に列車で大公らはガッチナに帰還している。その後、前回のように、明白な拘束解除の書類交付などの記述はない。

その後、大公は、自家用車を奪われたために、行動範囲が狭まり、ガッチナの家の周囲を散歩する。また時節柄、そりやスキーを使用している。またペトログラードに対して種々の理由で出かけることもあった。ここから翌1918年２月21日（３月６日）に、日記が中断されるまで、特に変哲のない記述が続いている[17)]。

ミハイルは外部世界の情勢にも注意を払っていた。とりわけ大公は自己

17）なお1918年２月１日から日記の日付は露暦と西暦の併記となる。ロシア社会において西暦が用いられ始めたことの反映である。

の運命を委ねた憲法制定会議の経緯を入念に追った。大公はこの会議に対して期待することがあったからであろう。しかし会議はボリシェビキにより延期され、最終的には物理的力によって解散させられた。大公は1918年１月６日、日記に次のように記している。「昨日憲法制定会議がチェルノフ議長のもと開催された。だが噂によればその解散の布告が既にもう出されたということである。平穏なデモがあったが、それがボリシェビキによって撃たれた。戦いはボリシェビキと社会革命党の間で起きている」。

12月31日、大公は「1917年はあらゆる人に多くの悪と悲惨をもたらした。」と指摘した。

※

日記中断直後の、1918年３月11日（西暦）、ミハイルとジョンソンは、人民コミサール会議の命令でシベリアのペルミに追放されることになった。今回の追放は、前２回のものとは異なり、有無を言わさないものであり、また大公からの条件闘争を受け入れる余地はなかった。それでも残されたナターリアの尽力で、ペルミにおいて大公らが収監から解放されている。さらに復活祭をともに過ごすという口実で、ナターリアがペルミに行くことが許可されたのであった。

1918年の残された日記は、４月25日（５月８日）から５月29日（６月11日）のものである。この間、ミハイルは上述のようにペルミに滞在していた。大公はペルミおいてホテル住まいであり、ある程度の自由は許されていた。一日に一度、地元の義勇軍本部に出頭して報告をするという条件付きである（のちには出頭先が一方的に地方のチェーカー本部に変更される）。すでにナターリアがペルミに到着していたので、大公は滞在の場所をホテルからどこか適当な場所に変更しようと探している。だが５月５日（18日）、ナターリアはペルミを去る。大公の日記では、「シベリアの諸都市では捕虜が権力を握る」という表記がある。すなわちチェコ軍と白軍が合流して、赤軍にあたる可能性が出てきたのであった。その混乱を避けるため、まだ鉄道が動いているうちにナターリアは帰還したのである。大公

は別れの悲しみとさみしさを感じるがどうしようもない。

５月５日、「私はナターリアの出発後非常に悲しく感じた。全く空虚であり、全てのものは別に見えて部屋も違ったように見えた。」

そしてこれが両者の最後の別れとなった。

日記は５月29日（６月11日）で終わっているが、西暦６月12日から13日にかけての夜、大公とジョンソンは、ペルミのチェーカーに誘拐されて、郊外で殺害されることになった。殺害の目的は、内戦において白軍に大公を奪われることを防止することと推測される。

※

１年余りにすぎないが、ミハイル大公の日記を通読して感じたのは、大公が政治的人間ではないということである。日記に記されているのは、ありきたりの日常である。享楽的な暮らしである。乗馬、ドライブ、狩猟、散歩、ピクニック、親しいものとの集いである。ミハイル大公には極論すれば何か積極的なことをおこなうことは期待されなかった。王朝を支える一つの支柱の役割が求められたのだ。このことから考えれば大公の在り方は適切と言えるのかもしれない。

しかしながら、大公は、ナターリアへの変わらぬ愛を貫き通し、「貴賤結婚」を皇帝らの制止を振り切って敢行することで、すでに揺らいでいたロマノフ朝の基礎を道義面からさらに動揺させた。しかしその否定的評価は王朝の倫理に従ったものである。見方を変え、個人主義的観点に立てば、大公は自分の恋愛感情に正直であり、誠実であったとの評価も可能である。日記から明らかに見て取れる大公とナターリアの相互を思いやる関係を見るにつれてそう感じざるを得ない。

政治に関しては、とりわけ総力戦体制構築のために、国民の信任を得る内閣の組織が求められたが、革命に至るまで皇帝は一貫して否定的態度をとり続けた。この問題は、皇帝が総司令官として前線に出払った後は、内閣を支えていたのが、事実上アレクサンドラ皇后やラスプーチンであるという構図が現れさらに錯綜した。皇室関係者の中においてさえ、反ラス

プーチンと国民の信任を得た内閣の組織ということにはっきり賛成し、皇帝に意見するものさえ出現する。

ミハイル大公は、皇帝の弟という立場から目立ったことはできなかったが、２月革命の直前においてロマノフ王朝を救うために、立憲君主制を目指す運動に明確に加担した。日記に記されている皇帝に対する説得といわゆる大公マニフェストは、その段階においてロマノフ朝とニコライ２世を救う唯一の方策と考えられたからである。

ニコライ２世がミハイル大公に譲位をしたとき、ミハイルは臨時政府の首脳との会談の末、帝位継承を放棄する。ミハイルに帝位継承について全く何の準備もなかったことを考えれば賢明な判断であったろう。ミハイルが多数派の常識的な助言を容れたということは、逆説的ではあるが立憲君主としての資質を示したのかもしれない。